

# ASHUREY CLASS

2024

受難週の瞑想

No.3 2024. 3.26

# 「受難週の瞑想」をする上で大切な視点

【新改訳2017】 マタイの福音書4章17節  
この時からイエスは宣教を開始し、  
「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と言われた。

- イエシュアの公生涯での一切の言動は、徹頭徹尾「御国の福音」です。イエシュアの語ったことばとなされた奇蹟は、すべて御国のデモンストレーションです。「御国」(マルフォト)はメシアが統治する国であり、その到来には、「すでに」と「いまだ」の緊張関係にあります。
- イエシュアの口から出る一つひとつのことばは「霊であり、いのち」です。しかも、それは預言的であり、奥義的であり、重層的なのです。

# 「受難週の瞑想」をする上で大切な視点

【新改訳2017】ヘブル人の手紙4章12節  
神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、  
たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、  
心の思いやはかりごとを見分けることができます。

- イエシュアの受難は「神とサタン」「霊と肉」との壮絶な戦いです。  
「受難週の瞑想」を通して、私たちの内にある肉の本質を知ると同時に、  
霊によって生きることに「目覚める」(「ウール」וּלְ)ことです。

# 1. テキスト ①



- 「受難週の瞑想」の第三回目は、「**枯れたいちじくの木**」です。

【新改訳2017】 マタイの福音書21章18～22節

- 18 さて、朝早く都に帰る途中、イエスは空腹を覚えられた。
- 19 道端に一本のいちじくの木が見えたので、そこに行ってみると、葉があるだけで、ほかには何もなかった。それでイエスはその木に「今後いつまでも、おまえの実はならないように」と言われた。すると、たちまちいちじくの木は枯れた。
- 20 弟子たちはこれを見て驚き、  
「どうして、すぐにいちじくの木が枯れたのでしょうか」と言った。
- 21 イエスは答えられた。「まことに、あなたがたに言います。もし、あなたがたが信じて疑わないなら、いちじくの木に起こったことを起こせるだけでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ』と言えば、そのとおりになります。
- 22 あなたがたは、信じて祈り求めるものは何でも受けることになります。」

## 2. 「空腹を覚えられたイエシュア」①

●今回の箇所(特に21~22節)は聖書の中でも難解な箇所と言われています。なぜ難解なのでしょう。質問の答えになっていないように見えるからです。しかし真の問題は、神のご計画の全体像を知る知識が希薄であることに起因しています。イエシュアの言動のすべては御国の福音であることを忘れてはなりません。その視点から語られていることを知ることが、この箇所を理解する上で重要なことなのです。

### 18 さて、朝早く都に帰る途中、イエスは空腹を覚えられた。

●「朝早く都へ向かう途中」ではなく、「朝早く都に帰る途中」となっています。面白い表現です。なぜこんな書き方をしているのでしょうか。イエシュアにとって、エルサレム神殿は「わたしの家」だからです。

●イエシュアが「空腹を覚えられた」とあります。滞在先のベタニアで朝食を食べることができなかったということではありません。もしそのように読むならば、的はずれの解釈となります。イエシュアが「空腹を覚えられた」という記述が公生涯の「最初」と「最後」にあります。「最初」は悪魔の試みを受けるために40日間荒野で過ごした後(4:2)、「最後」はエルサレムでの滞在中です(21:18)。

## 2. 「空腹を覚えられたイエシュア」②

● 「空腹を覚える」と訳されたギリシア語「ペイナオー」(πεινάω)は、マタイの福音書25章で「羊と山羊のたとえ話」で「あなたがたはわたしが空腹であったときに食べ物を与え、渴いていたときに飲ませ、」(35節)とあります。ここでの「あなたがた」とは、終わりの日の未曾有の苦難を経験する「イスラエルの残りの者」を助けることなる異邦人のことを指しています。「空腹」とは、信仰の危機を意味します。すなわち「空腹であったとき」、あるいは「空腹を覚えられた」とは、イスラエルの民の信仰が危機にさらされていることを意味しています。

● 40日間断食をしたイエシュアは肉体的には限界に達していたはずですが。反面、「神の口から出る一つ一つのことば」によって満たされていたのです。そのイエシュアが「空腹を覚えられた」というのは、神のことばによって生きることができていないイスラエルの民の信仰に対して、霊的な危機感を感じられたと解釈できます。このことは、今回の「実を結ばないいちじくの木」によってより強調されているのです。基本的に、イエシュアはイスラエルの家の失われた羊のために遣わされているからです。

## 2. 「空腹を覚えられたイエシュア」 ③

【新改訳2017】 マタイの福音書21章19節

道端に一本のいちじくの木が見えたので、そこに行ってみると、葉があるだけで、ほかには何もなかった。それでイエスはその木に「今後いつまでも、おまえの実はないように」と言われた。すると、たちまちいちじくの木は枯れた。

● 「いちじくの木」に注目しましょう。「いちじくの木」のギリシア語は「スユケー」(συκή)ですが、ヘブル語は「テエーナー」(תְּאֵנָה)となります。この語源は「ことを起こす」という意味の「アーナー」(אָנָה)です。この語根から由来するもう一つの名詞として「タアナー」(תְּאֵנָה)があります。旧約で一回限りで「さかり」と訳されています。

【新改訳2017】 エレミヤ書2章24, 26節

24 また、欲情に息あえぐ荒野に慣れた野ろばだ。さかりのとき、だれがこれを制し得るだろう。これを探る者は苦勞しない。発情の月に見つけることができる。

26 盗人が、見つかったときに恥を見るように、イスラエルの家も恥を見る。彼らの王たち、首長たち、祭司たち、預言者たちも。

## 2. 「空腹を覚えられたイエシュア」④

●エレミヤ書2章では、偶像礼拝をするユダの民が糾弾されています。そこでは神とイスラエルの民とのかかわりが「夫婦」に譬えられています。ところが、神の民はその「はじめの愛」から離れてしまっただけでなく、彼らは「二つの悪」を神に対して行ったのです(2:13)。その一つは「いのちの水の泉である真の神を捨てたこと」、もう一つは「溜めるためることのできない壊れた水ためを掘ったこと」です。これはだれが見ても愚行というほかありません。その愚行による苦い結末が「恥を見る」(=源泉のない民となる)と予告されているのです。

●その描写の中に、24節「欲情に息あえぐ荒野に慣れた野ろばだ。さかりのとき、だれがこれを制し得るだろう」があります。ここではだれも制することができない状態を「**さかりのとき**」(「夕アナー」קִרְבָּן)としています。



## 2. 「空腹を覚えられたイエシュア」⑤

●イエシュアの時代、私腹を肥やし、暴利を貪り、神のものを盗み、宗教を食物にしていた祭司階級などは、まさに「欲情に息あえぐ野ろば」そのものです。その野ろばが「さかりのとき」の状態を、イエシュアが「いちじくの木」に喩えているのだとしたら、そのいちじくの木は呪われる運命にあってもおかしくありません。事実、イエシュアはその木に対して「今後いつまでも、おまえの実はならないように」と言われました。するとたちまち、いちじくの木は枯れたのです。「枯れた」を意味する「ヤーヴァシュ」(ׂוּׁשׁ)は、エゼキエル書37章の「枯れた骨の幻」にある形容詞「枯れた」(「ヤーヴェーシュ」ׂוּׁשׁ)という語彙の語源です。

●これは預言的言動であり、エレミヤの時代の「王たち、首長たち、祭司たち、預言者たち」がバビロンの捕囚の民とされたように、イエシュアの時代のユダヤ人たちも同様の運命にあることを示したのが「枯れたいちじくの木」の出来事なのです。

### 3. 「枯れたいちじくの木」 ①

【新改訳2017】 マタイの福音書21章20節

弟子たちはこれを見て驚き、  
「どうして、すぐにいちじくの木が枯れたのでしょうか」と言った。

●イエシュアの弟子たちは「いちじくの木が枯れた」という出来事の意味を理解することができませんでした。なぜなら、イエシュアのことばはユダヤ人たちにこれから起ころうとする預言だったからです。このイエシュアの預言は、A.D.70年にローマによってエルサレムが陥落し、ユダヤ人が世界離散することで成就しました。このことが必ず起こることを教えたのが、続くマタイ21章21節のことばなのです。

【新改訳2017】 マタイの福音書21章21節

イエスは答えられた。「まことに、あなたがたに言います。もし、あなたがたが信じて疑わないなら、いちじくの木に起こったことを起こせるだけでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ』と言えば、そのとおりになります。

### 3. 「枯れたいちじくの木」 ②

● 「いちじくの木」はイスラエルを意味しています。その木が枯れるとは「死」を象徴します。しかもこの「いちじくの木」が、「この山」と言い換えられます。聖書で「この山」といえば「エルサレム」のことです。そのエルサレムに向かって、「立ち上がって、海に入れ」(=原文「持ち上げられよ。そして、海に投げ込まれよ」)は、異邦人の手に落ちて、ユダヤ人たちが世界離散されることを意味します。「海」は、聖書においては「異邦人の諸国」の象徴です。これはイスラエルの民とエルサレム(神殿)が再び建て直されるために、通らなければならない神の必然的出来事なのです。ですから、イエシュアが弟子たちに「もし、あなたがたが信じて疑わないなら、いちじくの木に起こったことを起こせるだけでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ』と言えば、そのとおりになります」と言ったのは、神のご計画において必ずそのようになるという信仰を持つことを求めているのです。

### 3. 「枯れたいちじくの木」 ③

●さらに、22節の「あなたがたは、信じて祈り求めるものは何でも受けることになります」とあるのは、未来のことです。21節と22節はあくまでも御国の到来について語っています。つまりイエシュアの初臨と再臨の間に起こることが語られているのです。ですから、弟子たちが御国の約束を知り、またそれをもたらす神のご計画を信じて祈り求めることは、「何でも(=すべて)受け取ることになる」(未来形)ともイエシュアは言っています。

●「何でも受けることになる」の「何でも」とは神のみこころにそった「何でも」であり、しかもそれを「受けることになる(受け取る)」のは将来のこと、つまり御国が完全に到来するキリストの再臨の時です。これが天の御国の福音における「いちじくの木」に込められたメッセージです。それゆえ、神のご計画の全体を知ること、そしてその中にある神の約束を知ること、とても大切なことではないでしょうか。

## 4. 「エルサレムに対する主のみこころ」 ①

●再度、21節にあるイエシュアの「まことに、あなたがたに言います」に目を留めたいと思います。

●「まことに」(「アーメーン」 אָמֵן)ということばと、「もし、あなたがたが信じて疑わないなら」には共通の語源があります。それはヘブル語の「アーマン」(אָמַן)です。それから、名詞「信仰・信頼」を意味する「エムナー」(אֱמֻנָה)と「アーメーン」(副詞)が派生しています。「まことに」も「信仰」も、「神の約束は真実であり、確かであり、信頼されるべきもの」という意味です。つまり神のご計画や神の約束に対する信頼を意味することばなのですが、それらが意味する内容を知るために、語源の「アーマン」(אָמַן)の初出箇所である創世記15章を見てみることにしましょう。

## 4. 「エルサレムに対する主のみこころ」 ②

【新改訳2017】 創世記15章12～17節

- 12 日が沈みかけたころ、深い眠りがアブラムを襲った。  
そして、見よ、大いなる暗闇の恐怖が彼を襲った。
- 13 主はアブラムに言われた。「あなたは、このことをよく知っておきなさい。  
あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、四百年の間、  
奴隷となって苦しめられる。
- 14 しかし、彼らが奴隷として仕えるその国を、わたしはさばく。  
その後、彼らは多くの財産とともに、そこから出て来る。
- 15 あなた自身は、平安のうちに先祖のもとに行く。  
あなたは幸せな晩年を過ごして葬られる。
- 16 そして、四代目の者たちがここに帰って来る。・・・」
- 17 日が沈んで暗くなったとき、見よ、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、  
切り裂かれた物の間を通り過ぎた。

## 4. 「エルサレムに対する主のみこころ」 ③

●創世記15章はアブラムに対する神の約束とそのご計画が語られている箇所です。神の約束の要点は二つあります。一つはアブラムの子孫が星のようになくなること。もう一つは彼の子孫に土地が賦与されるということです。その範囲はエジプトの川から大河ユーフラテス川までであり、アブラムがその生涯に歩いた範囲です。その約束が実際どのようにして実現されるのか、アブラムは質問しました。その答えはひとつの契約の中に啓示されました。その契約は契約の当事者同士が切り裂かれた動物の間を通り過ぎることによって結ばれるものですが、いざそれをしようとしたときにアブラムに深い眠りが襲い、その間に神である主だけがそこを通り過ぎました。一方的ですが、通り過ぎた主にはその約束を履行する責任が生じるのです。

●この契約における重要な点は、「見よ、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、切り裂かれた物の間を通り過ぎた」という部分です。

## 4. 「エルサレムに対する主のみこころ」 ④

●切り裂かれた物の間を通り過ぎたのは、「煙の立つかまどと、燃えているたいまつ」と表現していることです。しかしこの表現は「神である主」を表わしていると同時に、神が約束をどのようにして実現するかという方法をも啓示しているのです。その方法とは「煙の立つかまどと、燃えているたいまつ」に象徴されます。省略するなら、「かまど」と「たいまつ」です。それは「苦しみと解放」「さばきと回復」「審判と救い」「死と復活」とも言い換えることができます。この二つの出来事を通して、神のご計画と約束が実現されるということです。これを信じるのが「**信仰**」なのです。

●神は「煙の立つかまどと、燃えているたいまつ」によってご自身の計画と約束を実現されます。「煙の立つかまどと、燃えているたいまつ」はワンセットです。したがって、**イスラエルを象徴するいちじくの木が「枯れた」**ことで終わるのでは決してないことを信じなければなりません。なぜなら、神は「燃えるたいまつ」(原文は「火の松明」・「ラッピード・エーシュ」**שֵׁנִי תְּלֵלִי**)であることを暗に示しているからです。



# 今回の瞑想のまとめ

【新改訳2017】イザヤ書62章1節

シオンのために、わたしは黙っていない。エルサレムのために沈黙はしない。  
その義が明るく光を放ち、**その救いが、たいまつのように燃えるまでは。**

(※「シオン」はエルサレムの雅名、エルサレムの救いを「たいまつのように燃える」ことにたとえています)

● 枯れたいちじくの木々の再生、海に入れられるエルサレムの救い、回復と再建を信じる信仰こそが、聖書のいう信仰であり、その信仰こそが、神の前に義(=神に対する人間の正しいかかわり)と認められるのです。

● イスラエルが頑なになってしまったことは、神がご自分の民を退けてしまったのではないことを、使徒パウロはローマ11章で「神の賜物と召命は取り消されることがない」(11:29)と語っています。なぜなら教会が天に引き上げられた(携挙された)のちに、イエシュアをメシアとして拒否していたユダヤ人が回心して、「イスラエルの残りの者」となるからです。ここにイスラエルの将来があります。やがて、イスラエルは再び地上で神を証しする時が来るのです。